コメ
米から
ツナ
繋がる
コレカラ
未来へ

2013年 真宗大谷派長浜教区
東日本大震災救援物資搬送報告

Vol.3

１１月１２日（火）～１４日（木）

お米を東北の被災地に直接お届けいたしました。
ご提供いただきましたこと厚く御礼申し上げます。
今後も、仙台教務所（現地復興支援センター）と連携し、
継続した復興支援活動を展開してまいりますのでより
一層のご協力をお願いいたします。

→南三陸町・防災対策庁舎

↑仙台市若林区
いまだがれきが残る。

↑東北別院
（仙台教務所・
現地復興支援センター）

↑がんこ屋仮設住宅

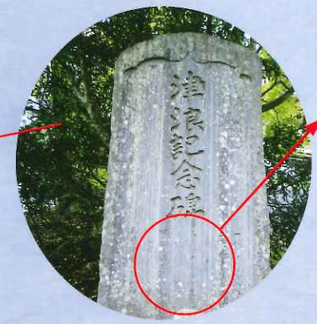
↑長浜教務所にて、
お米の積み込み。

今回ご提供いただいた救援物資

お米（白米・玄米）7,820kg （約 130 俵） 飲料水 30ℓ

これまでの総量

お米 約 17,000kg 飲料水 約 2,300ℓ



←西光寺の津波記念碑。
「一、想起せ昭和八年三月
二、大地震の後には津波に
注意せよ
三、三四十年に一度は津波
が来るものと思へ
四、急に潮が引いたら警鐘
ならせ
五、警鐘聞いたら高い所に」
と記され、後世へ津波への
警戒を伝えている。

↑石巻市立大川小学校

〔届け先〕

①福島県 相馬市 がんこ屋仮設住宅（初）
お米 5キロ 110袋
②福島県 相馬市 小高地区農業復興組合（初）
お米 5キロ 150袋
③福島県 相馬市 大野台第７仮設住宅（初）
お米 5キロ 150袋
④福島県 伊達郡 桑折町 桑折仮設住宅（2回目）
お米 5キロ 254袋
⑤岩手県 大船渡市 長安寺（2回目）
お米 5キロ 300袋
⑥岩手県 大船渡市 西光寺（3回目）
お米 5キロ 150袋
⑦岩手県 陸前高田市 正徳寺（3回目）
お米 5キロ 100袋
⑧岩手県 陸前高田市 三日市仮設住宅（3回目）
お米 5キロ 30袋
⑨岩手県 陸前高田市 本稱寺（3回目）
お米 5キロ 100袋
⑩宮城県 仙台市 ニッペリア仮設住宅（初）
お米 5キロ 150袋
⑪宮城県 仙台市 海楽寺（初）
お米 5キロ 8袋 飲料水 30ℓ

※一部玄米を精米しお届けしました。
なお、米の1袋あたりの重量には若干の誤差があったため、お預かりした米袋数量とお届け重量に差異が生じています。
※()内はこれまでお届けした回数です。

相馬市
がんこ屋仮設住宅にて

大船渡市
西光寺にて

大船渡市・長安寺にて

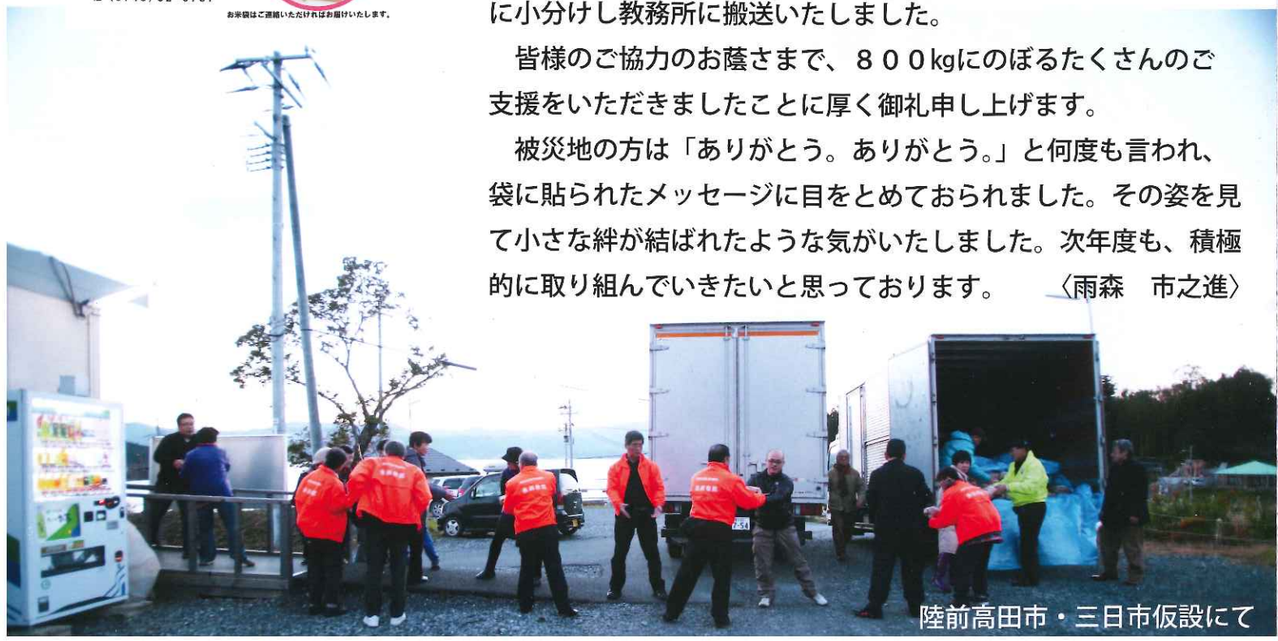
参加者の声

東北の被災地の方々にお米を届けましょう！と長浜教務所が５月１９日教区同朋大会の資料の中に“米から繋がる未来へ”というチラシによって、今回で３回目となる支援物資の勧募を呼びかけられ、協力をお願いされました。

それを受けて、私たち２３組の定例役員会で、過去２回は、個人的な対応でありましたが、（一部の門徒の方はそのことをご存じなかったのかも…）今回は、組の行事の一環として、一致団結して取り組むことを決定いたしました。早速、勧募チラシ1,０００枚を印刷し、２３組３６ヵ寺に役員から各門徒さんにお配りいただくとともに、各寺院でも放送等で呼びかけをいたしました。そして、提供いただいたお米を組で５kg の袋に小分けし教務所に搬送いたしました。

皆様のご協力のお蔭さまで、８００kgにのぼるたくさんのご支援をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

被災地の方は「ありがとう。ありがとう。」と何度も言われ、袋に貼られたメッセージに目をとめておられました。その姿を見て小さな絆が結ばれたような気がいたしました。次年度も、積極的に取り組んでいきたいと思っております。　〈雨森　市之進〉


陸前高田市・三日市仮設にて

福島県・常磐線。
列車の走らない線路に草が生い茂る。

参加者の声

生まれて初めて東北に足を踏み入れるご縁にあい、有意義な３日間を経験させていただきました。２年半以上経過し、ＴＶや雑誌等で報道されている状況をこの目で確認したかった。

初日は、福島県相馬市の仮設住宅（原発から２０km 以内の被災者が多数住まわれている）にお米を手渡し、そこでお逢いした双葉町の若い人たちの笑顔を見て一安心しました。夕暮れ近くになって、浪江町方面へ国道を西進し、２０km 圏内に入った途端状況が一変しました。全く手つかずの大震災当日のままの状態が一面に広がっており、唖然としました。地震により潰れかかった家屋、一階部分を津波にさらわれたサッシの無い家々、圃場の中に放置された自動販売機、原型をとどめないような車の数々、岩手や宮城県ではもう見ることの出来ない状況でした。また、仙台への帰路途中で、集落内の異様に光る街路灯と、全く光がささない民家を見、ゴーストタウン化された状況を体験した時、あの若い人たちの笑顔の裏側が少し解ったような気がしました。言いようのない焦燥感にとらわれ、明日の見えない、将来を描ききれない多くの被災者を思うと、やりきれない気持ちで一杯になりました。

私たちが豊かさを求めてきたその代償は、余りにも大きすぎる。敦賀原発の３０km 圏内に居住する我々にとって、他人事では済まされないことです。子どもや孫たちの未来を確固たるものにしていく為に、原発稼働について真剣に考えていこうではありませんか。約４０年間電力業界に身を置いてきた者として、懺悔、懺悔の気持ちで一杯です。　〈三上　悦示〉

相馬市・小高地区にて

手を振って見送ってくださる三日市仮設の皆さん

参加者の声

２日目の午後、岩手県陸前高田市の仮設住宅へお米をお渡しした後、近くに数人のご婦人が陶芸教室に集まっているのが見えました。「私は琵琶湖の近くから来ました。」と言って近寄ると全員の目がぱっと輝きました。↗

↘「そんなに遠くから来られるのがわかっていたら、もっと良いのを着てきたのに」と言って逃げようとされます。「どうかそのようなことを言わないで下さい。私だってこんなのを着ているのですから。」相手は私の顔と赤いジャンパーが不似合いなのがわかって、にっこり笑っておられました。初対面の気まずさが消えて、ずっと前から知っている人のように思えました。

被災で、すべてを失った人々の明るさは、大きな悲しみを体験した人のみがもつ明るさなのかもしれません。

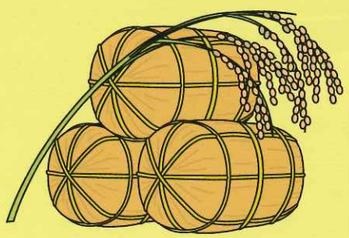
このたび、被災者支援のつもりで参加しました。しかし、はげまされたのは私自身でした。　〈笹原　絹子〉

↑海では、復興に向けてカキの養殖がはじまっている。

本稱寺・わすれなの鐘

ニッペリア仮設住宅での炊き出し

↑炊き出しの準備



参加者の声

長浜教区からの東日本大震災救援米搬送で現地に初めて足を運んでみて、一番哀しみとして映ったものは、岩手県陸前高田市の本稱寺（佐々木隆道住職）の「仮本堂」への訪問でした。夕方近くで少しあたりが暗くなって仮本堂内が逆に明るく、御本尊も流失されたのか。心ある人により新しく寄進されたものか正面にはお内仏が安置されている。その左側には木彫りの阿弥陀如来像が数体。右側には寺族と思われる大きな写真があり、まるでお通夜にお参りしているようであった。

本堂の外にはたった一つの遺物となった吊り鐘が「わすれなの鐘」としてパイプで吊るされていた。震災で故郷を離れておられる人々の一刻も早い帰心を願って。本当に暗くなった夕刻に１回突かせていただく。

本山の報恩講中の「語りべ小屋」初日に佐々木住職は「当寺は海岸より２km 離れ、ここまでは津波は来ないと油断していた。東北で２０ヵ寺余りが被災、内５ヵ寺が復興出来ていない」と語っておられました。

ご縁があれば東北へ行き、つぶさに現状を見てください。　〈藤田　勲〉

本稱寺・こぢんまりとした仮本堂。